192 SECTによる肺野、肺門、縦隔のガリウム断層シンチグラム——肺癌を中心に——

服部孝雄、竹田　寛、前田寿登、中川　毅
（三重大、放）並河尚二（同、胸外）

対向型ガンマカメラECT装置を用いてガリウム断層像を作成、肺癌の診断における価値について検討した。

クエン酸ガリウム約3 mCi 静注72時間後、1投影当たり15～20秒、4度毎180度回転させ計12～15分間のECTデータ収集を行なつた。

肺癌27症例において、ECTでは22例（81%）で腫瘍が検出され、conventional scintigramでの16例（59%）と比較して明らかに向上した。なかでも、扁平上皮癌ではECTにて大きさにかかわらず12例全例検出された。一方腺癌での検出率はECTにても13例中7例（59%）と低く、特に、3 cm以下の微少なものでは8例中2例（25%）しか検出できず、組織型による摂取率の差が推察された。

肺癌の腫瘍集積、あるいは肺門・縦隔リンパ節集積と健常部肺野の集積の比を定量的に測定し、組織型やリンパ節転移の有無による集積度の傾向についてさらに症例をふやして検討する。

193 肺癌放射線治療前後におけるガリウムシンチグラフイ所見と予後との関係について

綾部善治、一矢有一、桂木　誠、桑原康雄、
神宮賢一、松浦啓一（九大放）

ガリウムシンチグラフイは、悪性腫瘍症例において原発巣の検出、病巣範囲の決定、転移巣の検出等に広く利用されている。また、シンチグラム所見の経時的変化は、治療効果判定のための検査所見の一つとしても使われているが、その有用性については、未だ議論がなされており、評価は定まつていない。今回、放射線治療を行なつた原発性肺癌約80例を対象として、治療開始前および終了後におけるガリウムシンチグラフイ所見の変化と予後との関係を検討し、治療効果判定のための検査としてのガリウムシンチグラフイの有用性について評価した。

---

194 原発性肺癌における腫瘍シンチグラフィの臨床的検討

坂田博道，吉村　広，島袋国定，城野和雄
中條政敬，篠原慎治（鹿大　放）

われわれは^{67}Gaシンチグラフィを施行した原発性肺癌160例および同時期に^{201}Tlシンチグラフィを実施し得た50例を対象として，両核種の原発巣および肺門・縦隔・頸部リンパ節転移の検出能について検討を加えたので報告する。原発巣では^{67}Gaの陽性率は137/160（86%），^{201}Tlの陽性率は38／50（76%）で^{67}Gaが優れていたが，心陰影に接する左下肺野を除く部位では両者の陽性率に差はみられなかった。肺門縦隔リンパ節転移の検出能について^{67}Gaシンチと胸部X線像を比較してみると，肺門部では胸部X線像が優れていたが，縦隔リンパ節転移（特に中下部縦隔リンパ節転移）の検出に関しては^{67}Gaの方が優れていた。臨床的に頸部リンパ節転移が確認された29例について^{67}Gaシンチと触診所見とを比較してみると，^{67}Gaでは直径2 cm以下の3例は陰性であったが，シンチ施行時に触知し得なかった3例が^{67}Gaで明瞭に描出された。所属リンパ節転移に関する^{67}Gaと^{201}Tlの比較では肺門縦隔リンパ節転移に関しては^{67}Gaの方が明らかに優れており，^{201}Tlの有用性は低いと考えられた。

Presented by Medical*Online